看護師の経験を重ね、大学院で助産師のキャリアアップを図った立場から

明神　美奈

高知県立あき総合病院　助産師

私は８年間看護師として高知県立安芸病院（現在　高知県立あき総合病院）の外科・耳鼻科・眼科・産婦人科の混合病棟で勤務していました。看護師として主に術前後の看護や緩和ケアに関わってきました。特にターミナルの方が多く、患者様の死に直面することが多々ありました。入職した初めのころは、人の死に直面する事がつらく、故人や遺族の方とどのように接するといいのか悩み、声をか

けることもできませんでした。自分自身、従来の死後のケア（鼻・口・肛門に綿を詰める、顔・手のバンド、寄り集めの化粧品での死化粧など）に疑問を持っていました。先輩看護師に教わったことをそのまま実施していたため、自分の行っているケアに自信を持つことができずにいました。そんな時、従来行われていた死後の処置を、先輩看護師と共に死後のケアに変えようと、院外の勉強会への参加等を行い、新たな死後のケアを取り入れる活動をしました。自分自身の知識、技術を向上させ、根拠を持ってケアすることで、私自身、患者様や残された家族の方へ自信をもって関わる事ができるようになりました。１つ１つのケアに根拠を持ち、患者様にとってより良いケアを提供することができるようになり、私自身のやりがいにも繋がりました。看取りのケアを行う一方で、同病棟では新たな命の誕生もありました。看護師として、分娩の間接介助を行い出産場面に遭遇する事が何度かありました。命の誕生に産婦さんや家族の喜びを身近に感じ、私自身も温かい気持ちになりました。しかし、分娩時のケアに対しても助産師のお手伝いと言った感じで、十分な知識がないまま関わり、産婦さんや家族の方に申し訳ないと思うことや、自分自身の物足りなさを感じていました。出産場面への関わりを繰り返す中で、もっと産婦さんやその家族に関わりケアできることはないか、「おめでとうございます」をもっと心から言える自分になりたいと考えるようになりました。

そんな時、上司からの勧めもあり高知大学大学院実践助産学課程へ入学しました。大学院では、助産師としての基礎知識から高度専門職業人として必要な女性、子ども及び家族をエンパワメントする能力を学びました。他病院にて助産実習を行わせていただき、助産技術の習得をすると共に、当院での分娩ケアを振り返り、分娩ケアを見直してくための視野を広げる事が出来ました。大学院での学びは、プレゼンテーションや研究が苦手な私にとって、努力の日々でした。また、実習や研究も思っていたより大変で、挫けてしまいそうでした。しかし、実践助産学課程１期生６人で支え合いながら乗り越えることができました。臨床経験してきた者は経験談や臨床で学んできた技術や判断能力、大学からの者には新しい知識や臨床経験がないからこそ気づくことのできる視点があり、互いに刺激し合い成長できました。苦手だったプレゼンテーションも、現在助産師として保健指導や両親学級、いのちの教室など行い、対象者のニーズに応じてどのような方法で伝えたら良いのか考える際に自分の糧になっていると感じています。

現在、高知県立あき総合病院の助産師として勤務し２年目になります。助産師として経験はまだまだスタートしたばかりです。今年４月からは助産師外来を開設し、妊娠中から産後まで継続したサポートを行っています。１つ１つの分娩・産後で密に関わりを持つことができ、安心して分娩・産褥期を過ごして頂く事に繋がっていると考えます。当院は、東部地域で唯一出産できる病院です。これからは安芸地域だけでなく、東部地域全体との情報交換など行い、各地域と連携して妊産褥婦、またその家族を支えるようになるのが理想です。そのためにも今後、助産師として自分の行うケアに自信を持ち、対象者様と関われるよう、日々学び、知識・技術を向上させていくよう努力していきたいです。「おめでとうございます」を心から言える助産師であり続けたいと考えています。